

令和5年度 農福連携試験導入事業 実績報告

1. 目的

有機農業は慣行農業と比較して、人手が必要な作業があるが、過疎地域である当町では人口減少により、人を集めることが年々難しくなっており、今後より一層困難になることが予想される。このため、地域ではまだ行われていない農福連携の導入による新たな労働力の確保に関する実証試験を行う。

※農福連携とは、一般的には障害者等の農業分野での活躍を通じて、自信や生きがいを創出し、社会参画を促す取組のことを指し、農業分野においては新たな働き手として、その可能性に注目が集まっています。

2. 場所及び依頼事業者

実証試験圃場：安平町追分旭

事業者：札幌市内A社

3. 試験導入した作業

作業内容	利用者の評価
かぼちゃ播種	○
かぼちゃ定植	△
かぼちゃ肥料散布	○
かぼちゃ収穫	○
かぼちゃマルチ撤去	○
かぼちゃ選別	○
廃棄かぼちゃ片付け	○
ハウス) 肥料散布	○
ハウス) 散水チューブ設置	○
ハウス) 防草シート設置	○
ハウス) 除草	○
ハウス) ダクト用ポール設置	○
ハウス) ハウス横除草	○
ハウス) 防草シート片付け	○
ハウス) その他資材片付け	○
トマト除草	○
トマト脇目取り	△

トマト収穫	△
トマト誘引クリップ直し	△
トマト葉かき	○
トマト下枝片付け	○
トマト成長点留め	△
キュウリ誘因ヒモ設置	△
キュウリ誘因支柱設置	○
キュウリ除葉	△
キュウリ一節留め	△
キュウリ成長点留め	△
大豆除草	△
大豆収穫	○
大豆殻散布	○
人参マルチ撤去	○
人参除草	△
人参収穫	○
スイートコーン除草	○
じゃがいも収穫	○
ビーツ収穫	△

※評価の内容について

○：問題ない

△：作業にあたって注意が必要

4. 全体を通した利用者の感想

1) 通常時（職業指導員とペアで一組の場合）

- ・作業はまじめに一生懸命やってくれる。
- ・男性2人だったので、力のいる作業も頼めて助かった。
- ・ペアの方が効率の上がる作業もあるので良かった。
- ・作業はあまり早くない。要領を得るまでに時間がかかる感じ。細かい作業は苦手かも。
- ・2人で1.5人分か。

2) 食事について

- ・食中毒防止の為との事で、毎回買いに出っていたが、休憩時間が短く、作業に支障が出ないか気になった。
- ・おやつ・飲料等については、しっかり用意して対応してくれて助かった。

水分をしっかりと取る様にやってくれていた。

3) 増員してもらった際に気になったこと

- ・ 人数を頼むとやたらと固まって作業をしようとする人がいて気になる。
- ・ 私語が多く、作業の効率が気になる。
- ・ ビーツ収穫時、トマト収穫用のコンテナを持ち出して、座りながら車座になって、談笑しながら作業していた。楽しく作業をしたいのはわかるが、効率を優先してもらいたい。

4) 事業所へ要望したいこと

- ・ 作業時は、正確に効率良くスピードを意識する。私語はつつしむ。
- ・ トイレは休憩時に済ますなど、基本的・常識的な事はしっかり社員教育してもらいたい。

5. まとめ

今回の農福連携事業は、障害のある方と障害者就労施設の職業指導員がユニットを組み、現地で作業を行う施設外就労を基本として、人数不足の際は、いわゆる生活困窮者を交えて実施された。

作業の依頼にあたっては、A社がコーディネーターの役割を果たし、福祉事業所との調整を行った。

施設外就労では、働き手の特性に合わせた調整が可能な出来高払いを念頭に置いた請負契約となる場合が多いが今回は地域で初めての試みでもあることから利用者になじみのある時給単価換算での契約により事業を実施した。

指示した作業に対する達成度合いは、全体としては概ね良好な結果が得られたものの、個別の作業内容によっては注意が必要という結果となった。

一般的に利用者である農業者側からすると経営上の観点からコスト意識が働き、必然的に一人当たりの作業効率を求めがちである。一方、受託者である福祉事業者側としては、就労者ごとに異なる特性による作業効率の違いを作業人員の調整で埋め合わせ、全体としての作業量を確保しているという違いがある。

この認識の違いは、今回の事業でも確認することが出来た。

このような認識のギャップを埋めるためには事前の協議により、それぞれの立場や価値観の理解を深めたうえで、合意事項を契約書に記載するなど明文化する必要があると思われる。

今回の結果を踏まえたうえで、今後地域内で農福連携の取り組みが定着・拡大することが期待される。